

## 市場社会とは何か

講師 間 宮 陽 介

（京都大学大学院 人間・環境学研究科教授）

### ・国際化・ボーダレス化・グローバル化

国際化・ボーダレス化・グローバル化、この3つの言葉、普通は同じ意味で用いますね。でもどうもこれらは違うのではないかと、という感じを最近強めているんです。

日本でいいますと、1980年代は国際化の時代だったと思います。しきりに「国際化」という言葉が使われまして、大学で新設学部を作ったり、新設大学ができたりする時に、「国際...学部」、「国際...大学」というふうに、国際という言葉が盛んに使われたのが80年代ですね。90年代に入りますと、「国際化」という言葉はあまり使われなくなってきました。その代わり「ボーダレス化」という言葉が出始める。でも半ば過ぎますと今度は「グローバル化」という言葉が主流になってくる。そういう風な時代区分というのができると思います。

確かに3つは違うと思うんです。「国際化」から「グローバル化」へという大きな流れがあり、そのちょうど過渡期に「グローバル化の時代」が位置している。時期でいうと1990年前後です。その1つの象徴的な事件といえますか、出来事が「日米構造協議」だったと思うのです。みなさんはもう知らないかもしれませんが、この日米構造協議は当時ずいぶん話題になりました。まずその会議の名称。そもそもその意味がどうもはっきりしない。「構造」というのは一体何なのか。単なる「日米経済協議」でいけないのか。それがどうして「構造協議」なのか。とまあこんな具合に、会議の名称からして話題になりました。

これには意味があると思うんですね。それはたんなる経済協議ではない、やはり構造協議なのです。といえますのは、それまでの国と国の間の経済交渉は、とりわけ貿易の場合がそうですが、国境線の境目における問題をめぐる交渉だった。貿易ですからモノが出入りし、アメリカから日本へ、日本からアメリカへと、モノが出入りする。そのちょうど出入りする境目のところでいろいろ問題が起こり、それをめぐって2国間、あるいは多国間で協議がもたれた。問題の代表的なものが「関税」ですね。関税の率が高いと、当然国内で売られる時には関税を上乗せした分、高い価格で売られますからあまり売れなくなる。とうぜん輸出は相手国に対してクレームをつけるわけです。そうした関税と、もう1つは非関税障壁、これが従来の問題でした。

ところが日米構造協議になると、国と国の境目の問題から、もっと国境の内側の問題へと、焦点がシフトしてきました。日本なら日本国内のさまざまな制度や慣行が自由な貿易の妨げになっていると、相手国からクレームが出されたわけです。いろんなことが問題にされました。アメリカは、日本国内のいろんな法律、それから法律じゃないけれども、さまざまな経済慣行、ならわしみみたいなものですね、そうしたものを撤廃しろ、と要求しました。

これは見ようによっては、内政干渉ですね。法律を作ったり改変したりするのは国家の主権に属するわけですから。その法律に対してクレームをつけるのはある意味では内政干渉であり、じっさい、内政干渉のゆえをもって、アメリカを批判をする人がかなりいました。当時よく話題になった法律に「大店法」という法律があります。これは中小の商店を保護するために設けられた法律で、ある町に大きなスーパーとかデパートが出店しようとする際、届け出制にしたり、地元商店との協議を義務づけたりするものです。それをいちいちクリアしなければ出店することができないわけですから、じっさい店舗ができるまでに何年もかかることがめずらしくありませんでした。当然これはアメリカにとって障壁になるわけです。「トイザラス」というアメリカの大きなおもちゃ屋がありますけれど、あれを日本に作る時、「大店法」にひっかかった。外国企業に対する参入規制として働く「大店法」を撤廃しろというのがアメリカの要求でした。

これは法律ですが、法律じゃない例として日本国内の「系列」という企業間の関係をあげておきましょう。例えばトヨタ自動車は子会社と系列関係を持っています。トヨタは系列会社の部品メーカーと優先的に取引契約を結ぶ。ということはつまり他の部品メーカーがトヨタとの取引に入ってくるのにはくいわけです。アメリカは自由な商取引への制限となる、系列のようなインフォーマルな制度も、問題にしました。これは民間企業と民間企業との関係ですから、それに対して他の国がいちいちクレームをつけるのも変な話なんですけれど。しかしアメリカの企業にとって、閉鎖的な日本の取引慣行がおおきな制約になっているのは事実なわけです。

要するに日米構造協議の「構造」とは国内の制度ということなんです。国内の制度までが自由な商取引に障害になるとして問題にされ始めた。これは従来の経済協議とは明らかに違います。従来のは国内の制度は与件として、もっぱら国境線上の問題を協議したわけですから。

日米構造協議は90年代、グローバル化の時代の序曲です。それ以降、グローバル化が急速に進んで行くのは、みなさんご承知のとおりです。

グローバル化というのは地球的な規模で壁が取り払われていくという事態です。国境自体がなくなっていく。このグローバル化を推進する牽引力となっているのが市場、マーケットの力です。市場は国境を問わないという性格がきわめて強いですね。モノは国と国の間を超えて自由に移動する。お金はもっとそうですね。ある所で資金を運用したほうが儲けが多いなら、瞬時に資金が移動する。モノやカネ、それにヒトさえも、条件がいいところにすぐ流れて行く。国境を本来問わないわけです。

こういうふうには、グローバル化の時代に入ったのが90年代で、それに対して最近ではそれをもっと推進しろとか、いやそれはおかしいといった反グローバリズム論などが相対立する形で出て

きています。国際化とグローバル化の違いは市場を考える場合にも非常に重要だと思います。「国際化」と「グローバル化」が意味するところの違いを、つぎに、スミスとマルクスの違いに即してお話ししてみようと思います。

## ・市場の発生に関するスミスとマルクス

アダム・スミスが『国富論』という有名な書物を書いたのが1776年、18世紀の後半です。イギリスの産業革命はそのちょっと後になりますから、スミスが『国富論』を書いたのは産業革命前夜ということになります。前夜といいましても、イギリスにおいては中小の生産者・小工業者が盛んに生産活動を行っていて、当時は株式会社もぼつぼつ出始めていた。株式会社といっても製造業ではなくて、主として貿易関係ですね。つまり海外に出て、商品を仕入れて国内に持ちかえって、利益をあげる。当時は交通があまり発達してませんから、非常にリスクが多い仕事だった。資金を調達して、利益があがればその資金を提供した人に利益を分配をする。資金を出す人も、いちかばちかの賭けをするようなものだったわけです。その資金提供者が株主という形になって、株式会社が出てくる。産業革命以前だといっても、産業革命後とそんなに断絶しているわけではない。ベーシックなところは、徐々に徐々に発達をしていったわけです。そういった時代に、スミスは『国富論』という本を書きます。その本に見られるスミスの市場観と、次の世紀、19世紀の半ばから後半にかけて、ドイツのカール・マルクスという社会主義者、彼は『資本論』という本を書きますが、その本の中で、マルクスがイメージしている市場というものは、ずいぶん違っている。これはちょうど「国際化」と「グローバル化」を考える場合と対応しているのではないが、そんなふうに思います。

そこでスミスの方から始めますと、スミスの言う市場社会というのは、個人と個人の関係の網の目です。最初に2人の人がいれば交換というものが起こります。交換といっても物々交換とは必ずしも限らず、お金を媒介とした交換というものもある。いずれにしろ、そうした2人の人との間の取引、交換関係が最小単位であって、それがやがて3人、4人、いろんな人が加わって1つのネットワークを作る。ちょうどインターネットのネットワークと似たようなものです。LANのような小さなネットワークがあって、それらがつなぎ合わさって地球的規模でのネットワークができるのと似たところがあります。スミスの場合には2人の人の交換から市場社会というネットワークが始まるわけです。

アダム・スミスの市場では、個人は「交換性向」、いわゆる交換をする本能みたいなものを持っていて、決して渋々、取引に応じるのではない。彼は交換本能をもつ人間とそうでない動物との違いを1つの例を用いて示しています。橋の上に肉をくわえた犬がいて、橋の上から川面をのぞいている。すると下のほうに肉をくわえた犬が映っている。それを見た犬は、川に映った犬の肉を取ろうとして吠えます。口を開けますから、当然肉は川に落ちてしまう。つまり犬というのは「取引」を知らない。モノをやり取りすることを知らず、力づくで相手のものを奪おうとする。しかしそれが結局、犬に損をさせてしまう。これに対して人間は、交換を行う。自分が持たないものであっても、

相手が欲しいものを渡せば、自分が欲しいものを手にいれることができる。そうしたやり取りを行うすべを知っている。その基本になるのが交換性向という本能だと、スミスは言うのです。

アダム・スミスは経済的なやり取りだけを考えましたけれども、後にレヴィ＝ストロースという人類学者が言葉のやりとりも交換の一種と見た。人間は言語を通してやり取りを行う。その際、言葉というものは経済的取引におけるモノと非常に似通った位置にあることはすぐに分かると思います。一方はモノを通してやり取りを行う、他方は言語を通してやり取りを行う。彼は言語的交換のほかに、もう1つ、婚姻のシステムも交換として捉えています。異論があるかもしれませんが、彼は、婚姻を女性を媒介にしたやり取りだと見たのです。レヴィ＝ストロースは南アメリカ、その他のいわゆる“未開社会”をフィールド・ワークして、婚姻の構造を解き明かし、その結果を『親族の基本構造』という非常に分厚い本にまとめました。翻訳もありますけれども、その中で彼は婚姻の構造を、女性を媒介として部族と部族が関係を結ぶシステムと見たわけです。

モノや貨幣、言葉、それに女性。これら3者は似通った位置にある、そうレヴィ＝ストロースは考えました。別に女性がモノだと言っているわけではない。重要なことは社会は何かを媒介にして交換を行い、交換によって社会は広がっていくということです。このような考え方はスミスと結構似たところがあると思います。人間は交換をする本性を持っている。1人じっとしているのではなくて、何かを媒体として広がっていく。スミスの場合にはそれが経済的な交換だったし、レヴィ・ストロースはそれをもっと広げるわけです。

私はよくこう言った比喻を使うのですが、水の中に石を落とすと波紋が同心円状に広がっていきます。最初の石が人間の本性、交換本能みたいなもので、それが同心円状に広がっていく、交換を通して広がっていったら、円がどんどん大きくなっていきます。このようなスミスの市場に対してマルクスの市場は非常に対照的です。おなじ比喻を用いれば、マルクスの市場は燃え尽きていく紙のようなものです。新聞紙の上に小さな火種を落とすと、1点が焦げて、しだいに広がっていきます。つまり市場という力は、そこが中心となって徐々に広がる、ただし、広がるけれどもスミスのな広がり方、社会、世の中、地球が発展していくという形での広がり方ではなくて、何かを食い尽くしていく、蝕んでいく、空白状態、虫食い状態にしていく、そういった広がり方をマルクスは見ている。

そのマルクスにとって市場というものは決して人間の本性に発するものではない。スミスのように交換本能を持っていて、そこから2人の交換が始まり広がっていくものではなくて、市場は共同体と共同体の間に発生するというふうに言っています。共同体の内部では市場的な取引というものはもともと行われていない。物々交換であったり、困っている人にただであげる贈与であったり、市場とは違う原理に基づいてモノのやり取りが行われているというのが普通です。別の共同体でもそうです。ところが共同体どうしが接する境目になりますと、その境目の所で市場的なやり取りが行われるようになる。こういうふうにマルクスは考えるわけです。例えば友人間でお金の貸し借りを言うさい、利子を取ることはまずしないでしょう。3ヶ月貸したから、利子何パーセントくれなんて言わない。それからお金を貸して相手がすぐ返してくれればいいですけども、相手がなかなか

か返さない、その場合には催促がしにくいですね、身近な人の中での貸し借りは。つまり身近な人の中でのお金の貸し借りは、借りた人が非常に優越的な地位に立つ。ですから身近な人の中でのお金の貸し借りは、貸した人が気を使わなければいけないという非常なおかしな事になるわけです。ところが市場の原理だと、返さなかったら請求するわけです。それでも返さなかったら、訴えることもできる。非常にドライに事を運ぶことが出来るわけです。

それからイスラム世界。キリスト教世界でもそうでしたけれども、利子を取らない、利子を取ってはいけないという利子禁止例がたびたびだされています。ヨーロッパでも中世にはそうでした。イスラム世界ではもうちょっと厳格です。利子を取ってはいけないというコーランの教えがある。今はどうか知りませんが、イスラム文化圏の中では利子を取ってはいけないというのは基本原則です。それでは対外的な場合は、どうするのか。外国にお金を貸した場合、利子を請求しないのか。当然請求するはずですね。ただでお金を貸すわけがない。要するに對内的な原理原則と對外的な実際とは、食い違ってきます。

マルクスの市場の発生論というの、そうだと思うんです。共同体の内部と共同体間とは異なる原理が働いている。マルクスは、市場は共同体と共同体のはざままで発生した、というのです。共同体にとってマージナルなところで発生した市場はその後しだいに共同体の内部に浸透していく、これまでは無利子のやり取りだった貸し借りが利子を取る市場的な貸し借りにっていく、そうマルクスは考えたのです。人々の働きもボランティアであったり、無償の仕事であったりで市場的ではなかったけれども、しだいにそれが賃金労働に変わっていく。というふうにして、市場の原理が共同体の内部に浸透していく。そして最後に人間にまで、その市場の矢が至った時に、マルクスは市場社会、彼にとっては市場社会ではなくて、資本主義という経済システムなんですが、その資本主義が完成したというふうに見ます。人間までが市場化されるということはつまり労働力が商品となる、無償の労働やボランティアのような自発的な活動がやがて商品として売り買いされるようになる。働いて賃金をもらい、その賃金で生活をするようになっていったときに、市場というものは完成するんだというふうにはマルクスは考えたわけです。

これはスミスと明らかに違います。スミスの場合は、人間には交換本性がビルトインされていて、それによって交換を行い、交換のネットワークが市場社会を作り上げた。マルクスの場合はそうじゃなくて、個人以外のところ、共同体と共同体の境目に市場は発生し、それが共同体の中に忍び込んで共同体の内部を変色させていく。そして人間までも市場化したとき、そこに資本主義システムが成立するんだ、というふうにはマルクスは捉えるわけですね。これは先ほどの「グローバル化」と「国際化」と似ていますね。「国際的」ってインターナショナルでしょ。インターナショナルの「インター」というのは接頭辞ですよ。どんな接頭辞かという「...をつなぐ」という接頭辞です。インターナショナルは、インターネーションですから、国と国をつなぐというわけです。ですから国というのはちゃんとあらかじめあるわけ。いろんな歴史もあるし、文化もあるし、生活様式の違いもあるし、風俗、習慣、慣行も違う。先ほどの構造協議の例でいいますと、日本にはいろんな取引慣行

があるし、アメリカにもある。そうした独特な制度や慣行を持ちながら、それぞれの社会が存在している。インターナショナルというのは、それをつなぐわけですから、一色にするわけではない。同質化するわけではないんです。異質なものの異質性を残しながら、そこに閉じこもり井の中の蛙になるのではなくて何かつないでいこうというのが、インターナショナル、「国際化」の意味です。

インターナショナル（国際的）という言葉はもちろん英語圏には昔からありましたけれども、「国際化する」という意味のインターナショナルイズという言葉はありませんでした。どうしてかといえますと、ヨーロッパにとっては、ヨーロッパ社会＝国際社会だったからです。だからヨーロッパが国際化する必要はなかった。自分たちの住んでいる社会が、国際社会なんですからね。国際化ということが意識に上るのは、ヨーロッパ以外の国の人たちです。彼らにとって国際化とはヨーロッパ社会に入っていくことに他なりませんでした。

ところがです。今年の夏、新潟県の十日町市で「大地の芸術祭」という催し物があったときに、セミナーでジョージ・タレルという芸術家が言っていたことですが、国際化する、インターナショナルイズするというのが英語圏でも用いられ始めたそうです。それはグローバル化への批判としてです。グローバル化へのアンチテーゼとして国際化という言葉がでてきたそうです。

どういうことかといえますと、グローバル化は違うものをローラーでならしていく。市場という力でもって地球上を平らにならしていく。最初の頃はそれがいいことだと思っていた。ところがそのマイナス面がしだいに目立ち始めてきた。それに対するアンチとして、違うものを違うものとして認めながらそれをつないでいくという、国際化の発想がでてきたというわけです。

グローバル化が世界をならしていく1つの例を挙げておきましょう。これは経済の例ですが、グローバル化が進むと、各国が独自の福祉政策を取りにくくなります。例えば日本の企業や政府がグローバル化のまっただなかで、市民や労働者に対して手厚い保障をおこなったとしてみましょ。そうすると直接間接に生産物1単位あたりのコストがかさんできます。原材料費のほかに社会保障費もコストに入ってきてそれが製品の価格をつり上げる。手厚い福祉政策の結果、製品のコストがアップし、外国との競争に太刀打ちできなくなってくる。では国を閉ざすかというそれはできない。外国と競争するためにはコストを下げなきゃいけない。そのためには福祉水準も下げなきゃいけない。いろんなものを切り詰めなければいけない。というふうにして、よくグローバル化はデフレ的な効果を持つと言われていますが、その意味が今のことです。競争すると下げなきゃいけない。単にモノの値段だけが下がるのであれば万々歳ですけども、モノの値段だけではなく、福祉も切り詰められる。いろんな所でデフレ現象が起こってくるわけです。

その結果どういうことになるかということ、政治や行政に独自のことができなくなってくる。つまりマーケットによって固く縛られているわけ。市場というものはそういうものですね。競争しているところで、自分だけもっと儲けようと思って、高い値段をつけたって、つまはじきされてしまいます。市場の力に服さなければいけない。同じ事が世界的な規模で起こるのが、グローバル化ですね。それへの批判が起こってきている。批判といっても、ナショナリズムのように国を

閉ざす方向に向かうのではなく、異質なものをつなぐ、相互依存の方向にもっていかうという動き、このような動きが強まってきている。

「グローバル化」と「国際化」がスミスの市場観とマルクスの市場観に対応しているということを申し述べたわけですが、現代の市場をもう少し別の角度から見ると、いま幅を利かせているのはいわゆる「道具的市場観」というものだと思います。

## ．道具的市場観

よく政治家たちが、日本はアメリカその他の国々にインターネットなどIT関係で遅れをとった、遅れを取り戻すためには、規制緩和を進め、経済をもっと自由化しなければいけない、といます。彼らにとって市場というものは「道具」なんです。道具的な市場観 80年代のレーガノミクスやサッチャリズムも市場を道具視している点では同じです。国力を強化する、経済不況から脱出する、他国に後れをとらない、こうした目的のための手段として市場経済の活性化が唱えられている。その結果、市場化が非常に極端なところまで進みました。サッチャーは水道事業まで民営化しようとして、墓穴を掘ったと言われてますし、レーガン時代のアメリカでは刑務所の監視まで民営化しようとした。

彼らの依拠した新自由主義にはかなり道具的な市場観が強いと思います。これが、「新」が付かない、その代わり「古典的」という言葉をつけたらいいかもしれませんが、本来の自由主義との違いです。つまり本来の自由主義、イギリスを生まれ故郷にしている自由主義的な市場観というものは、スミスの場合そうですけども、市場を「社会のあり方」とみる。つまり取引交換というのはたんなる手段ではない。取引交換イコール社会なんです。人間2人以上集まれば社会ができるといわれますが、取引交換は社会を作る一つの形式です。家族や集団を超えて社会を広げていく非常に強力な形式です。

人間のもつ利己心は、奇妙に聞こえるかもしれませんが、社会を広げていく動因になる。利己心の対極にある利他心も人々を結びつける非常に強い靱帯になるけれども、家族などの親密な集団を超えて人々を結びつける力はもちません。もったとしても間歇的で持続性に欠けます。小さな社会を超えて、もっと大きな社会をつくる動因、それをスミスは利己心だと考えたのです。しかもこの利己心は交換本能に裏打ちされていますから、たんなるガリガリ亡者にはならない。自分のもっているものをあげましょう、だからあなたのもっているものを私に下さい、という形で交換を促すわけです。

私は市場のことを「社会」つけて「市場社会」といいます。なんで「社会」をつけるのか、市場だけでいいではないか、とよく言われるのですが、市場は手段や道具ではなくて、人びとの関係のあり方を示す形式なんです。ところが政治家たちが市場、市場という時には、彼らは市場をなにか便利な道具でもあるかのように考えている。市場を道具と考える点では、彼らは俗流ケインズ主義者 あえて私は俗流ケインズ主義者といえます と同じです。

市場社会を国際化やグローバル化を発端にして見てきたわけですが、こんどはそれを少し違う角度から見てみましょう。すなわち「安定」、「不安定」という角度からです。

## ・市場の安定化と不安定化

経済学にはさまざまな流派、スクールがありますけれども、古典派から現代の新古典派に至る流れは市場を非常に重視する経済学で、古典派・新古典派の経済学者から見ますと、市場というのは非常に安定的、予定調和的です。ところが、現代の市場が安定的かということ、決してそうではありません。むしろ非常に不安定な傾向を強めています。ケインズが見たのはまさしくこうした現代の経済、不安定で変転きわまりない経済であって、ケインズの経済学と古典派・新古典派の経済学を分かつのは、市場経済に対するこのような見方の相違です。

経済学の中にある2つの市場観の違いを見ると、綱引きゲームの喩えをもってくるのがいいと思います。普通、綱引きは赤と白が二手に分かれて力を競います。力が拮抗しているときには綱がなかなか動かない。均衡状態に入るわけです。新古典派の市場もこれと同じで、売り手と買い手、企業と消費者が互いに反対方向に綱を引き合う。一方は商品をできるだけ高く売ろうとし、他方はできるだけ安く買おうとする。そして2つの力が均衡したとき、市場は均衡状態にはいる。このときの価格が均衡価格です。

ところが、もしこういうふうな新種の綱引きだったらどうなるだろうか。ここでは、状況いかんによっては、赤が白に、白が赤にクラ替えることができる。均衡していても、向こうについた方が有利だと判断すれば、向こうについて、その結果、均衡が破れる。この新種の綱引きゲームにおいては、むしろ均衡などない、といった方がいいかもしれません。たまたま思惑が正反対に釣り合ったとき、瞬間的に力が均衡するにすぎない。

市場には2つのタイプのものがあって、それらは2つのタイプの綱引きゲームに対応すると思うのです。野菜市場や工業製品の市場は赤白がはっきり分かれた綱引きゲームに対応するといっているでしょう。一方、証券市場や金市場、土地市場などの資産市場は赤と白がクラ替えできる市場ですね。売り専門の投資家、買い専門の投資家なんているわけがない。売っては買い、買っては売って、利益を上げるのが、彼らの仕事ですから。「この株はもう下がるぞ」という思惑が市場全体に広がっていくと、人々は株を売り抜けようとし、株価は急低落しますし、反対にバブルのような時期には人々の楽観的な期待が一致して、株価は天井知らずに上昇していくことになります。このように資産市場では思惑の変化によって商品の価格は大幅に変化します。非常に不安定なのが資産市場の特徴だといっているでしょう。

現代の経済は、資産市場タイプの市場が徐々に徐々にウエイトを増してきている経済です。綱引きゲームのタイプがしだいに変わってきているということです。野菜市場タイプの市場と株式市場タイプの市場とではかなり性格が違います。両者を混同してしまうととんでもないことになる。

バブルの時期に、地価が上がってなぜ悪いのか、地価の上昇は需給関係の変化の結果であって、需要が増えれば地価が高騰するのは当然である、当然の上に、それは望ましいことでもある、そう



主張した経済学者がいました。こういうのを教条主義というのです。彼は市場には相異なるタイプのものがあることを少しも理解していません。実需と投機的需要の区別さえしていません。投機的価格も需要と供給の関係で決まりますが、ここでの価格は野菜市場のように資源配分上、望ましい働きをするわけではありません。地価が2倍、3倍に跳ね上がったのは、持ち家志向が強まったからではなく、不動産会社などの企業が転売目的で土地を買い漁ったからに他なりません。土地なんていうのは、以前は資産として売り買いされていたわけではないのに、やがて資産化し、挙げ句の果ては金儲けのための手段になってしまう。そうすると投機が蔓延し、経済が不安定化してしまう。バブル期とバブル後の日本経済、1997年のアジア通貨危機などは、第2のタイプの市場が取引規模で大きなウェイトを占めてきたことの結果といっても過言ではないと思います。

## ・市場社会と公共空間

最後になりますけれども、私は「公共性」の問題を、この10年のあいだずっと考えて続けています。もっと勉強しなければいけないと思っています。

最初の「国際化とグローバル化」の問題も公共性の問題と無関係ではない。国際化もグローバル化も煮詰めていくと、内と外の問題になってきます。国の内と外との関係…。内と外の関係が問題になるのは個人の場合でも同じです。個人には主観的な、自分だけしか分からない独自の世界というものがありますね。それと同時に人間は外の世界をもっている。世の中の動きとか自然の世界とか、外の世界がある。それで内側と外側の関係はどうなっているのだろうかというのは、哲学的な問題ですね。内側の世界だけが存在して外部の世界はその影だというのは主観論ですし、外側の世界だけが実在するというのは、唯物論的な世界観でしょう。

要するに内と外の関係はどうなっているのかということをも昔から哲学者は考えてきた。同様に、国の内と外はどういう関係にあるのかというのが、先の問題意識であったわけです。実をいえば、公共性の問題は内と外の関係のあり方いかん、という問題ではなからうか。例えば公と私、パブリックとプライベートという場合、パブリックな世界というのは外の世界、プライベートというのは内の世界ですね。公共性とはこの公=外、私=内の2つの世界のほさまに生じるものではなからうか、というのが私の問題意識なのです。

公と私のはさま、というのはこういうことです。もしパブリックがプライベートに優先してしまうと、滅私奉公的になっていく。個人なんかどうでもいいんじゃないかということになってしまう。ヨーロッパでは必ずしもそうではないと思うんですけど、日本では公が私に優先して、どうも滅私奉公が美德とされる傾向があります。それではこれが逆になるとどうなるかといえば、これもおかしい話になってくる。自己中心主義になって、パブリックなんてどうでもいいんだということになってしまいます。現代の消費社会はまさしく人々が「私」化した社会といってもいいでしょう。個人の欲望が肥大化して、欲望が社会を作っている。

わたしの思考方法というか、思考習慣は、まず両極端を考えてみることです。いまのケースでは、一方が滅私奉公的な世界という極端、他方はパブリックがない、個人の欲求だけからなる世界という極端です。現実はそのような両極端にあるわけではない。これは単なる中間という意味での量的な違いではなく、むしろ質的な違いだと思うのです。それでは質的な違いは何かということを考えていきますと、結局は内と外の境目、境界に行きつくんです。公共性の問題を考えるときには、内と外、公と私を考えなければならないが、ポイントは境目にあるのではなからうか、ということです。もっといえば、私と対立する公が公共的な世界なのではなく、むしろ公と私のはざまに公共性の空間が現れるのではないかと、とまあこのようなことを、ずっと考え続けてきたわけです。

これだけだと分かりづらいので、都市という空間を例にとってみましょう。都市とは何か。ある人は都市の生命は道路や広場にあるといい、またある人は住宅やビルなどの建築にあるといいます。これに対し私は、都市の生命は、内と外、内部空間と外部空間との境界にあるといたい。その境界をすたいになくしつつあるのが現代の都市なのではなからうか。現代の都市計画は都市の生命である境界部を破壊尽くしているのではないのでしょうか。

むしろ現代の都市にもある意味での境界がないわけではない。あるんです。しかしその境界は、例えば住宅地区と商業地区を分ける境目 壁なんですね。仕切線としての境界はあるのだけれど、空間としての境界にはあまりお目にかかりません。しかし空間としての境界がないわけではない。例外をあげれば、その1つが商店街ということになりましょう。商店街はまさしく境界領域にある空間、住宅区域と商業区域が交じり合うところに成立している空間です。これが駅前商店街になれば、もう1つ、交通システムが入ってきます。この駅前商店街は都心部の繁華街とは違った活気を帯びています。だいいち生活感がある。店の種類も多様で、生活の多様性をそのまま反映している。さまざまなゾーンを複合する地域、それが駅前商店街をつくっているわけです。

公共空間はさまざまな領域の境界に生じるといいましたが、なかんずく公と私の交わるところに生じる。滅私奉公が支配しているところには公共空間は生まれません。個人の自発性が抑圧されているところ、公共空間もまた抑圧されているのです。公と私の境、公と私がお互い交わるところに公共的な空間ができる。

例えば家を取り囲む壁を考えてみましょう。窓や玄関といった開口部をひとつもたない壁は家の内部と外部を完全に仕切ってしまう。この壁によって密閉された建物の内部は内輪の非常に同質的な空間となります。一方、外部はという、これは内部にとっては全くよそよそしい、俺は知らんよといった空間になってしまう。これじゃいけないというので、壁を取りはずしてしまおうというのが、グローバリゼーションだと思うのです。壁を取りはずすわけだから風通しが良くなる半面、内側がすけすけになってしまう。いい様に見えるんですが、実は壁がないから外部もなければ内部もない。壁というものは密閉しては困るけれども、それがなくなってしまうと内部と外部の区別がなくなる。区別がないということは人間にとっては非常に由々しき事じゃないかと思えます。人間というのは、自分の内側の世界を持っていないと、外側との関わりを持ちえない。でも反対に

外側に没入してしまうと、自分がなくなってしまう。建物の場合もそうであって、完全開放、完全密閉ではいけないから、窓を作ろう、玄関を作ろうということになる。窓や玄関というのは空間構成上、とても重要な意味をもってくるわけです。

建築家の中には、「玄関の哲学」という言葉を使う人もいます。つまり玄関というのは単に空気を入れ替えたり、人が出入りしたりすること以上の意味をもっている。なによりもそれは、公と私のはざまにある空間です。家の前の道路が公的な外部空間、家の中が私的な内部空間だとしたら、玄関はこれら2つの空間の境目にある。この点が大事なのです。外側から帰ってきた人は、公から私の世界へ入ってくる、玄関はその転換点なんです。その転換が急激に行われるとまずい。例えば仕事から帰ってきて、そんなに急にはプライベートな顔にはもどれない。子供がどうした、ご飯はどうするといった話になると、夫婦喧嘩になるのがおちです。

要するに外から内に入っていくには、自然に入っていかなければいけない。日本では土地が狭いからあまり実現できそうにもないのですが、道から建物に入っていくときアプローチがあったほうがいい。そのアプローチも直線よりは、曲がりくねっていたほうがいい。曲がりくねった所に木でも植えてあると、外から自然と内側に入っていくことが出来る。外部空間が自然に消えていくからです。さらに玄関があって、中に入る。玄関から内に入ると、まず何があるかといえば、リビングなどの比較的パブリックな空間がある。寝室や風呂場などのプライベートな空間があることは希です。そういったものはもっと奥の方にある。

もうわかりだと思いますが、玄関とその周辺は外部と内部、公と私のはざまにある空間で、公的でありながら私的、私的でありながら公的という、公私両様の性格をもった空間なのです。道路と比べれば私的だけれども、寝室や風呂場から見ると公的です。玄関は開口部というたんなる点ではなく、周囲を併せたひとつの空間になっているわけです。玄関を中心にして公と私がいくつもの層をなして一つの空間を作る、これが私のイメージする公共空間なのです。

同じ事が人間社会についても言えると思います。人間社会もさまざまなレベルの公と私、いわば入れ子状をなしてつながっている。壁でもって公と私を分断してはいけないし、壁を取り払って内部をあけすけにしてもいけない。だから問題は壁の性格如何だということになります。公的であると同時に私的でもある、そのような壁こそが公共空間を作る、とっていいでしょう。



最後は脈絡のない話になってしまいましたが、時間になったようですので、これで終わらせていただきます。長い時間、ご静聴ありがとうございました。

平成12年11月7日 於 附属図書館ホール